［課題］

【第４回課題】（1500 字～2000 字程度）
あなたが重要と考える社会思想家を１人挙げて，その重要性を論じなさい。原則として，その思想家自身の書いた著述（日本語翻訳でよい）にあたり，論述の各要所で引用しながら解答してください。

［本文］

政治的にも経済的にも閉塞感が指摘される昨今，再び注目すべき社会思想家は，1930 年代を代表する思想家の戸坂潤（1900-1945）である。1930 年代は昭和恐慌による経済のブロック化に始まり，五族共和を希求した満州事変や国家改造・天皇親政を目論んだ五・一五事件，二・二六事件を経て，日中戦争へ突っ込んでいった「政治」の時代である。この当時の世相について，1935 年に刊行の『日本イデオロギー論』の中で，次のように述べている。[1]

> 日本主義・東洋主義乃至アジア主義・其他々々と呼ばれる取り止めのない一つの感情のようなものが，現在の日本の生活を支配しているように見える。そしてこの感情によって裏付けられた社会行動は至る処吾々の眼に余っている。而もそうした種類の社会行動は何か極めて意味の重大なものであるかのように，巨細となくこの世の中では報道されている。

戸坂が中心となって立ち上げた「唯物論研究会」も 1932 年に設立され，機関誌『唯物論研究』の出版が始まっている。しかし，内務省からは共産主義団体よりであるとされ，1938 年には解散に追い込まれている。この当時強くなっていった全体主義について，戸坂は次のように続ける。[2]

> 日本主義・東洋主義・乃至アジア主義・等々の殆ど凡てのものは，如何にも尤もらしく意味ありそうなポーズを示す，処が実はその内容に這入って見ると殆ど全くのガラクタで充ちているのである。日本に限らず現在の社会に於けるこの切実で愚劣な大きな悲喜劇のト書きを暴露するのは，我々にとって，極めてツマラない併し極めて重大な任務にもなるのだ。

ドイツでもヒトラー政権誕生前夜の 1930 年に，のちのナチス政権批判につながるフランクフルト大学社会研究所の創設に参画している。欧州でも政治経済の行き詰まりは，必然的に安直なナショナリズムやポピュリズム政治を生み出していく。戸坂は日本における危機について次のように述べている。[3]

> 現在の日本は全く行き詰まっている，と世間では云っている。どこかで行き詰っているから色々の愛国強力運動も発生するのだろう。では，その原因はどこにあるのか。この非常時という言葉は，この行き詰りを解釈する言葉としては実は之は甚だ都合が悪い。なぜなら，他

ならぬ非常時の絶叫自身が非常時の原因だったということが判るからである。
日本の日本主義者達にとっては併し，事物の客観的な原因を理論的に穿鑿するというようなことはどうでもいい。いつでも説明は俗耳に入り易い尤もらしささえ持っていればいいのである。

戸坂は行き詰まりの世相においては，自由主義を装った保守主義，また社会主義によく似た全体主義が鎌首をもたげてくると警鐘を鳴らす。[4]　現在の政党政治においても，自由主義や社会主義的な規制政党ではなく，自由主義や社会主義の仮面を被り，日本を拠り所にする極めて保守的な政党や政治団体の発言に注目が集まっている。戸坂氏はこうした日本の政治状況は，歴史的で構造的なものであるとし，次のように喝破する。[5]

どういう精神主義の体型が出来ようと，それは，ファッショ政治諸団体の殆ど無意味なヴァラエティーと同じく，吾々にとって大局から見てどうでもいいことである。ただ，一切の本当の思想や文化は，最も広範な意味に於て世界的に翻訳され得るものでなくてはならぬ。丁度本物の文学が「世界文学」でなければならぬのと同じに，或る民族や或る国民にしか理解されないように出来ている哲学や理論は，例外なくニセ物である。

1941 年にエーリヒ・フロムは『自由からの逃走』の中で，ワイマール体制後に自由を手に入れたドイツ国民が，ナチス台頭を熱望した心理的メカニズムについて説明している。しかし，その 6 年も前に，戸坂は日本人の不安な社会心理について次のように分析している。[6]

今日復古主義の色々ある内で，吾々から見て根本的で又特徴的なのは，家族主義の強調だが，実は家族制度こそ，封建制が最も完備していたとも考えられる徳川時代に，社会秩序の動かすべからざる要石にまで発達したものなのだ。
日本主義というイデオロギーが産んだこの高度に発達した独占資本主義の現代から，資本主義一般とは著しい差異を持っている過去の封建制へ向って志向するという，この方向がとりも直さず漠然とした復古主義なのだから，こうした封建制への意識は，つまり社会の原始化の方向を追うことに他ならない。

信憑性のない「ニセ物」で，自由主義や社会主義によって宙に浮いてしまった日本主義は，アジア諸国を下部に位置付けた封建主義や家父長的な家族主義，さらにはアジア主義に囚われた軍国意識を巻き込みながら，必死に実体を得ようとする。そうした日本主義の焦りは，政治家や軍部，市民の意識の最終的な一致点である「皇道精神」に行きつかざるを得ないと警告する。そして次のように述べる。[7]

さて残された仕事は，この皇道主義（市民の方から望んだ運動）という日本主義イデオロギーのエッセンスが，如何に現下のファシズム政治理想とその政治機構とに役立てられるか，又ファシズムが照応している処の現下の資本制機構にどう役立てられるかを，今まで述べて

来たのとは逆のコースを取って，解明することだ。

戸坂の仕事は，2020 年代の現代こそ果たされなければならない重要な任務である。

文字数：2175 字

＜引用・参考文献＞

---

[1] 戸坂潤「ニッポン・イデオロギー」『日本イデオロギー論』（岩波文庫）岩波書店，1977，pp.132
[2] 同上，pp.133
[3] 同上，pp.135
[4] 戸坂前掲書「自由主義・ファシズム・社会主義」，同，pp.408-415 参考
[5] 戸坂潤「ニッポン・イデオロギー」，同，pp.153
[6] 戸坂潤「日本主義の帰趨」，同，pp.203 参考
[7] 同上，pp.207 参考